



闇を砦として

上野英信集

4

上野英信集 4

闇を砦として

一九八五年十二月二十三日発行

定価 三、五〇〇円

著者 上野英信

発行者 原田奈翁雄

発行所 径書房

東京都千代田区三崎町二一三―五

電話 〇三―二三四―四六〇八(編集)

〇三―二六三―七〇一九(営業)

振替口座 東京一―三二七二六

印刷 明和印刷

京美印刷

製本 懶積信堂

上野英信集

4

闇を砦として

径書房

＊カバ―絵・装幀 富山妙子

闇を砦として

廃 鉦 譜 7

その序の章 ついの夜 8

その一の章 わが泣き部屋は 25

その二の章 鬼が坂 43

その三の章 アリランの歌 60

その四の章 首陽の薇 79

その五の章 わたしの胸の心に 97

その六の章 骨噛み 142

わが廃鉦地図 165

S 少年のこと どきゅめんと・筑豊Ⅱ

179

廃鉱通信 180

S 少年のこと 191

鉱毒部落 200

骨を噛む 215

「筑豊コンサルタント」廃業宣言 216

基本的権利と生活保護 219

大量棄民政策の背景 221

銃と豚と 226

わがドロツキストへの道 230

火を掘る日日 237

南米の坑夫たち——炭鉱離職者の行方 238

移民戦線異状あり 254

ボタ拾い 270

福岡つれづれ 369

I 福岡つれづれ 370

II 日記から 376

あとがき 目隠しの鬼 391

解説／いのちのつやを 石牟礼道子 401

初出一覧 414

麤
鉞
譜

その序の章　　ついの夜

いまは合併されて福岡県鞍手町くらての一部になっているが、旧西川村は、かつて「西川筋」として名を知られた中小炭鉱の密集地帯である。古くから「一に豊州、二に泉水」とうたわれ、田川郡の豊州炭鉱と並んで筑豊の代表的な圧制ヤマとして恐れられた泉水炭鉱をはじめ数多くの中小炭鉱が、西川ぞいの、うなぎの寝床のように細く長い、入り組んだ谷あいおんがに群がっている。その昔、遠賀川上流の嘉穂かほや田川のあたりでは、これから新しい働き口を求めて遠賀下りをしようとする坑夫の門出にあたって親兄弟や仲間たちは、口を揃えて「どこへ行こうとお前の自由ばってん、西川の炭鉱にだけは行くなや」と忠告したものであるという。

坑主や坑夫の気性が荒いばかりではない。炭層も極度に荒くれている。炭丈すみたちは低く、断層は多く、加えて坑夫泣かせの松岩と呼ばれる珪化木けいかぼくが、あきれるほど多い。掘っても掘っても石炭は出ず、出るのは牛ほどの大きさもある松岩ばかり、ということさえめずらしくはない。まったく、この松

岩の巨大な根株ほど厄介ものはない。ツルバシも立たなければノミも通らない。しかも鉄のように重い。三池炭田ではこの松岩のことを「ゲッテン」と呼びならわしているが、まことに言いえて妙な名称である。筑豊でも、頑固一徹の偏屈者のことをゲッテン者というが、松岩こそ、言葉どおり地底のゲッテン者である。他所から流れてきた坑夫にこの西川筋の人間はまず訊ねる。

——お前や、なんば、掘りにきたとや。

——はあ、石炭ば掘りに。

——なに、石炭ば掘りに。とぼくるな。そげんなもんのありばすれ。帰れ帰れ。

——こうどなりあげて追い返す。もし相手が、

——はあ、松岩ば掘りに。

——そう答えれば、

——ほう、松岩ば掘りにてや。そうか。松岩なら、山ほどあるぞ。気張って働けや。

こう言つて即座に採用したものであるという。それほどの度胸と、人並みすぐれた腕の持主でなければ、一日ももたない難作業であつたのである。それだけにこの西川筋の坑夫たちは、わが腕に絶大の自信と誇りを持つ人間であつた。と同時にまた、粒選りのゲッテン者ぞろいでもあつた。西川筋の坑夫といえ、筑豊のどこへ行つても、善くも悪しくも一目置かれたというのも、ひとえにそのためであらう。

しかし、どれほど誇り高き腕もゲッテン気質も、むろんエネルギー革命という名の兇暴なゲッテンの前には、まったく無力でしかなかった。彼らはひとたまりもなく地底を追われて、松岩のようにボタ山の麓にうち棄てられ、おのがじし権力と繁栄を誇つた炭鉱もまた、将棋倒しに廃墟と化し

去った。新目尾炭鉱もその一つである。戦後最盛期には従業員数七百余をかぞえたヤマであるが、石炭産業合理化の激浪にもまれて次々に経営者を替えつつ衰退を重ね、一九六一年、最終的に坑口を閉ざしてしまった。その閉山前後の悲惨な状況は、いまなお私の眼底に焼きついて消えることはない。退職金はもちろん、積もりに積もった未払い賃金さえ清算されないまま解雇された百数十名の坑夫とその家族たちの生活は、文字どおり、この世の生地獄そのものであった。そのあらましについては、かつて『追われゆく坑夫たち』の「底幽霊」の章に書きとめておいたので、ここでは繰り返さない。また、そのような絶望的な状況下で最後の抵抗をこころみようとする労働者と、これを指導する盲目の組合長Nさんの悲劇的な闘いについても、同じ章に書きとめておいたとおりである。

そのNさんが「折入って相談したいことのあつて」といって、ひょっこり私を訪ねてきたのは、一九六三年の秋のことである。聞いてみると、一棟無人の長屋があるので、それを解体し、その古材を使って小さな集会所を建てたいと思うが、についてはこれら炭鉱施設の一切を差押さえている福岡国税局に、払い下げの交渉をしてもらえまいか、という話である。私はこころよくその任を引き受けることにした。しかし、解体には反対した。確かにひどく傷んで荒れ果ててはいるが、手を加えさえすれば、まだ十分に復旧可能な建物であることを、私は見て知っている。

「解体するなんて勿体なかですばい。手を入れて、いまのまんまの広さで活用しまっしうや。そして、その一部を私に使わせてくれませんか。どうせ誰か、管理人のようなものが必要でしょうけん。それを、私たち夫婦にやらせてくれませんか」
そう私は切り出した。

「また、そげなゾータンのこつを」

とNさんは苦笑した。彼はてんで私の提言を本気とは信じていないふうであった。あくまでもかかるかい半分の冗談であると思っっているらしい。

「いや、ゾータンごつではなかとです。まじめな話ですばい。私が前々から、ぜひどこか小ヤマの閉山炭住に住みたいと思うておるといふことは、あなたにも話しておいたとおりです。そして、適当な空屋があったら知らせてくださるごと、よくよく頼んであったではなかつか」

「うーん、なるほどそれは確かに聞いちよりましたばってん、やっぱりゾータンばいうてござるとやろと思うて……」

「ゾータンのこつ」

今度は私のほうが、そういつて苦笑する番であった。しかし、やがてすぐに私たちは固く手を握り合った。Nさんはいかにも嬉しそうに頬をあからめながら念を押した。

「え、本気にしてよかとですな。ほんなこつ、きてくれるとですな。ゆめんげな氣のしてなりまつせんが……」

「ほんなこつですとも。せめてあなたの片腕ぐらいにはなりたいたいと思いますばってん、かえって足手まといになるかもしれせんばい」

「いんにゃ、いんにゃ、片腕どころか、私の眼になってもらわんとならん。こげな力強かことはなかですばい。ほんに嬉しか。ばってん、ただ……」と、Nさんは見えない眼で私の眼を覗きこむようにして、「奥さんや子どもさんがさぞまあ苦勞さっしやろうと思うと、私や、氣の毒で氣の毒で……」

「なんのなんの。ご迷惑ばかりおかけすることになりましたよ。ばってん、どうぞよろしくお願いします」

私たちはもう一度、固く手を握り合った。

私は幾分かのためらいと不安を胸に覚えながら、妻に了解を求めた。荒れきった廃鉱での生活が、どれほど苦難にみちたものであるか、おぼろげながら私にもひしひしと想定できた。おそらく、底のないどろ沼であえぐような日々が、死ぬまでつづくことであろう。もはや、ものを書く時間もあるまい。どのようにして親子三人飢えをしのいでゆけるのだろうか。いずれにしてもその苦難の一切が、妻であり母である一人の女性にしわ寄せされることは、火を見るよりあきらかである。そのことを思えば、さすがに私の心は重たかった。しかし、妻はためらいもせず、こころよく賛成してくれた。ただ、私がいま手掛けているしごとを纏めてからにしてはどうか、あちらへいったら当分それどころではあるまいから、といった。私はちょうど、炭鉱の笑い話についてのエッセーを纏めている最中であつた。

「それもそうばってん、このしごととは、あっちへいって、じっくりあたためてからでも遅くはあるまい。あそこの生活がこのしごとを、もっともつと深めてくれるにちがいないと信じて」「そうねえ、それではわたしもそう信じて」

二人は一切の未練をきれいさっぱり洗い流したように笑い合った。母であつてみれば、なによりもわが児のゆく末が案じられてならなかったにちがいない。しかしそのことについて、妻は一言も語らうとはしなかった。

もちろん、すべてがとんとん拍子に運んだわけではない。親しい友人たちの中には、真剣に反対

する者も少なくはなかった。彼らの主張もやはり、「どこへ行こうとお前の自由ばってん、西川の炭鉱にだけは行くなや」という忠告そのままであつた。

「ほかの所ならともかく、あそこだけはやめとけ。あそこがどういふ所か、お前のほうが俺以上によく知っておるはずだ。どうなつたところで、お前はそれで満足だろう。しかし、妻子のことも少しは考えてみるものだ。選^まりに選^まつて、あんなひどい所に住みつくなんて。お前は、わが児が可哀そうとは思わないのか」

私は彼らの忠告を感謝しつつも、「もしそれで駄目になるような児なら、いつそのこと、早く駄目になつたほうがよいではないか。そうなれば、いつまでもわが児の将来に幻想を持たずにすむ。親子ともに気楽ではないか。それになにより、あんな所で成長すれば、少なくとも日本の未来に対してだけは、けつして幻想を持たない人間になるだろう。わが児の将来を考えないからではない。誰よりも真剣に考えればこそ、決心したことだ」と反論し、私が冷酷非情な親どころか、日本一熱烈な『教育パパ』たるゆえんを強調した。

反対派の友人とは逆に、私の西川行きを熱心に支持してくれる友人や先輩もあつた。

「西川行きとは氣に入つた。お前を見なおしたぞ。筑豊のどこに住もうが、ほかの所なら知りはずんばってん、西川ということになれば話は別だ。よか。全力をあげて応援してやる。あとのことは心配すんな。俺が知つちよる！」

思いもかけず西川をめぐるの論議の波があまりに高いので、私は少々西川行きを重荷に感じはじめたほどだ。私はもともと、ぜひそこに住みたいと思ひ定めていたわけではない。田川であらうと飯塚であらうと、あるいは山田であらうと海老津^{えびつ}であらうと、筑豊でありさえすれば、そして小

ヤマでありさえすれば、どこでもかまわなかったのである。ただ、たまたまNさんからの相談を受けて、新目尾炭鉱の空屋に居を定めようと思ひ立ったまでのことだ。ともかくなによりもまず、その空屋を確保することが先決問題である。私はせっせと大濠公園を歩いて福岡国税局に日参をつづけ、払い下げの交渉をした。

国税局の役人は最初、一棟という個別の払い下げは手続きが面倒なので、現在入居者のいる家を含めて、新目尾炭鉱の差押さえ建造物全部を、一括して買い取ってほしいといった。とんでもないことだ。そんな金もなければ、買い取る意志もない。こちらがほしいのは空屋一棟だけだ。あれこれ折衝の末、やっと一棟だけの払い下げを認められた。やれ嬉しやと、鬼の首でも取ったような気持で価格を訊ねたところ、差押さえ物件につき、官報に公示の上で他日入札を行なうとの返答である。すると入札の結果では、トンビに油揚げをさらわれるようなことも？　むろん、最高価格の入札者に払い下げることになります、と役人は答えた。一瞬、私は眼の前がまっくらになるような気持ちであったが、ここは捌手^{からめて}からと作戦を変え、それでは他に競争相手がなければ百円でも落札できるわけですね、と問い返せば、いや、それはこまりますよ、瓦と柱の代金くらいは出してもらわなければ、という。

「では率直にお訊ねしますが、国税局としては、いったいどの程度の見積りを」

「本棟のほうが一千万円と、別棟が一千万五百円、合計九千五百円というところですか」

「エッ！」と思わず私は驚いた。「別棟なんて、そんなものはありませんよ。一棟、長屋がスポーツと建っておるだけです」

「いや、ちゃんとあります。ほら、このとおり」

そういつて役人は、私の前に青写真をひろげて指で叩いた。

「ああ、これ！」

私はふたたび嘆声をあげた。

「これは、あなた、共同便所ではありませんか。この長屋一棟五世帯の使う共同便所ですよ。それですっかり壊れて、使いものにもならなければ、今後使うつもりありませんよ。それを別棟千五百円なんて……」

「瓦と柱は、まだ十分利用価値がありますから」と、国税局は同じ主張を繰り返した。

やがて年の暮も押し寄せまって、いよいよ公売の日が訪れた。こんなおんぼろ長屋を買おうという物好きなど、いるはずがないと思いつながら、私は不安でならなかった。私はNさんに頼んで数名のサクラに、あるいは五百円で、あるいは三千円で、というふうに入札してもらった。そしてぶじに九千五百円で、国税局のいう本棟と別棟を落札した。当然のことだ。誰がこんな一九三〇年建設の、骨と皮だけの古長屋を、一万円近くも出して買おうとする馬鹿があらう。国税局とやらも、なかなかどうして海千山千の商売人だ。

私は早速妻をつれていって、安物買いの銭失いの標本そのものの長屋を見学させた。妻はバスを降りて眼の前の長屋を一目見るなり、「まあ、長崎の竜踊りみたい！」と感嘆した。なるほどそういわれてみれば、まさに長崎の竜踊りだ。棟はうねうねと波打ってよじまがり、瓦という瓦は鱗のようにはねあがっている。そして裸の細い柱は、さながら竜踊りを演じる支柱のようだ。

それにしてもよくまあ崩壊もさせずに、これほど徹底的に破壊できたものだ、と私は感心せずにはいられなかった。戸障子はもちろんのこと、床板、天井、敷居、鴨居、柱に至るまで、はずせる